

## IDの観点によるシラバスの課題と提案

### A Proposal and Task on Preparing Syllabus with the Instructional Design Point of View

中嶋 康二, 小林 雄志, 藤島 真美, 平岡 斉士  
 Koji NAKAJIMA, Yuji KOBAYASHI, Mami FUJISHIMA, Naoshi HIRAOKA  
 熊本大学大学院教授システム学専攻  
 Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University  
 Email: koji-n@kumamoto-u.ac.jp

あらまし：本研究では、IDに基づいてシラバス作成のために必要となる知識やスキルについて課題分析を行い、課題分析図を提示した。この課題分析結果に基づき、サンプルとして複数大学のシラバスを調査した結果、多くの大学で、学習目標が行動目標で示されていない、学習評価に合格基準が明示されていないなど、IDを踏まえたシラバスとしては十分ではないことがわかった。多くの大学のシラバスの課題として授業の設計図を表したものとなっていないことが考えられたため、IDを踏まえた課題分析を活用してシラバス作成支援を提案した。

キーワード：インストラクショナルデザイン、シラバス、学習課題分析

#### 1. はじめに

平成23年度からの教育情報公開の義務化により、シラバスは各大学のホームページ上で公開されている。平成24年度のデータでは、約97%の大学がすべての授業科目のシラバスを作成している<sup>(1)</sup>。一方、シラバスとは、「学生が各授業科目の準備学修等を進めるための基本となるもの。また、学生が講義の履修を決める際の資料になるとともに、教員相互の授業内容の調整、学生による授業評価等にも使われる」ものである<sup>(2)</sup>。

インストラクショナル・デザイン(ID)は教育の効果・効率・魅力を高めるための理論や方法論の集大成である<sup>(3)</sup>。大学における教育の質保証、シラバスの実質化などを実現していくためには、IDの観点からシラバスを作成していくことが有効と考えられる。IDに基づいたシラバス作成を容易にするために、IDに基づいてシラバス作成の学習課題分析<sup>(4)</sup>を行うことは意義があると考えられる。

#### 2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、シラバスの実質化や、大学教員がシラバスを授業改善に資するものとするための方策のひとつとして、IDの観点でシラバス作成における課題分析を行い、教員のシラバス作成時に活用されうる指標として提案することである。本研究では、この学習課題分析の結果をもとに、現在公開されているシラバスと照らして現況を調べ、授業設計の課題分析を活用することの有効性について考察する。

#### 3. 学習課題分析

##### 3.1 「シラバスを書く」ための学習課題分析

シラバス作成上の学習課題分析とは、教員がシラバスを作成するための「課題」を構造化・系列化して示すものである。ここでの最上位の課題は「IDの観点でシラバスを作成できること」となる。これを到達目標として定め、その下位課題を明らかにして

いった(図1)。

シラバスに必須な項目をIDの観点で整理すると下位課題は、「科目の学習目標設定」「授業計画」「学習支援方策の計画」「学習評価計画」などになる。さらに下位のレベルには、例えば「学習評価計画」では、科目の学習目標到達と判断するための学習成果を設定する一方、「授業計画」では、その学習成果を導くためのタスクを同定して15回に振り分けていく、といった課題が並ぶ。

他方、「学修支援計画」の方策として、15回のうちの1回の授業の構成、LMS(Learning Management System)やeポートフォリオを活用した設計などが下位課題に挙がる。また、多様化する学習者の属性や学習環境を考慮し、例えば、社会人学生向けのオンライン学習環境のための設計なども「学習支援」の下位課題として考えられる。

これらの課題分析結果を、「授業の概要目的」「学習目標」などシラバスの項目の関連する箇所に対応させることで(表1)、授業設計の観点に基づくシラバスを作成できるようになる。

表1. 主なシラバス項目と下位課題の対応

	主なシラバス項目	関連する下位課題
1	授業の概要・目的	学習目標・学習支援
2	学習目標	学習目標・授業計画・学習支援
3	前提条件	学習支援
4	授業の方法	授業計画・メディア活用
5	授業計画(授業内容・課題)	授業計画・学習評価・メディア活用
6	評価方法・基準	学習目標・学習評価
7	教科書・参考書	授業計画・学習支援・メディア活用
8	履修上の注意	授業計画・学習支援

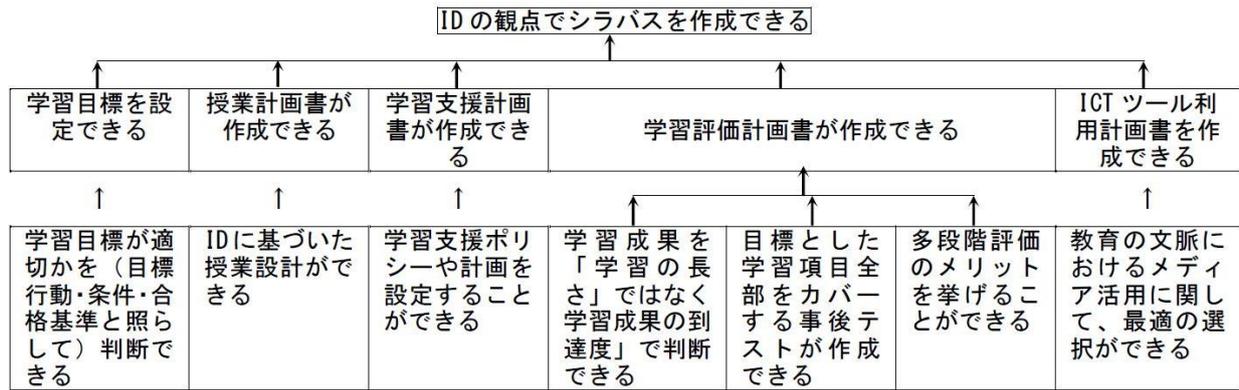


図1. IDの観点でのシラバス作成の課題分析図(一部抜粋)

#### 4. 各大学のシラバス作成状況

全国20校の国立・私立大学の理系・文系を含む専攻科目のシラバスに対して、IDに基づいたシラバス作成のための下位課題と課題分析図を用いて分析した。

その結果、シラバスの記述項目として、「授業方法・計画」「成績評価方法」はすべての大学が、「授業目的・目標」「教科書・参考書」は19校がその項目を設定しているなど、概ねシラバスのフォーマットに相違はない。しかし、各項目の記述内容では、課題分析結果の各課題に関わる要件が果たされていない、つまり、学習者の視点で科目の入口から出口までの全貌が理解できる記述となっていないケースが見られた。例えば、学習目標は行動目標で設定されている(20件中1件)、評価方法・基準として目標行動・評価条件・合格基準が明示されている(20件中1件)、授業計画の中でどのような課題が出されるのか示されている(20件中1件)、学習上のどのような支援が受けられるのか示されている(20件中2件)など、要件を満たしている割合は非常に少なく、学習者の準備学修等を進めることを支援する役割を果たせるようにするためには改善の余地があることが確認された。20件のサンプルが統計的に全国のすべての大学の全科目のシラバスを代表するものであるとは言えないが、少なからず同様の状況があることは想像に難くない。

#### 5. 考察

各大学とも専用サイトを設置するなどしてシラバス作成環境を整えているが、シラバスの記載内容が実質的な学修支援となっていないものが散見されている。その原因として、シラバスが授業の設計図であり、また学習者との契約書であるという特性を活かせず、機械的に授業に関する情報を載せるだけになっている可能性が考えられる。

この問題の改善方法として、シラバスの本来の意味を周知することが第1のステップである。第2のステップは、シラバスに載せるための情報となる授業の設計図を作成することであるが、教育の専門家

としての知識と技術を持っていることをすべての大学教員に求めるのは難しい状況であり、現状のまま皆が授業設計を実施することは容易と言えない。そこで、IDに基づいたシラバス作成のための下位課題を1つずつ学び、それを自らの授業設計に反映させることが必要となる。各下位課題ができるようになったのち、所属機関で定められたフォーマットの許容内でこれに基づいたシラバス作成を行う。そして、授業開始の際には、授業設計の詳細を記したシラバスを受講生に配付するという運用を行うことで、シラバスの実質化を果たすものとなるのではないだろうか。

#### 6. まとめ

本稿では、シラバス作成における授業設計の課題分析を行い、この分析結果を活用してシラバスを作成する手順を提案することを検討した。今後は、分析結果の妥当性を検証するとともに、これらの手順を実践することを学習課題とした大学教員向けのeラーニング教材を開発し、広く活用される形で提案したい。

#### 謝辞

本研究は、「特別経費(プロジェクト分)大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実 採択プロジェクト(7714S012628, 代表:鈴木克明)の助成を受けて行っている。

#### 参考文献

- (1) 文部科学省高等教育局:「大学における教育内容等の改革状況について」(2014)
- (2) 中央教育審議会:「学士課程教育の構築について」,用語集(2008)
- (3) 鈴木克明:「[総説] e-Learning 実践のためのインストラクショナル・デザイン」,日本教育工学会誌:29(3), 197-205(2005)
- (4) 野嶋栄一郎, 鈴木克明, 吉田文:「人間情報科学とeラーニング」,放送大学教育振興会,東京(2006)